

# 森林利用の諸形態

——ジャワと日本における焼畑の比較試論——

大 木 昌\*

## Forms of Forest Exploitation: A Comparative Study of Shifting Cultivation in Java and Japan

Akira OKI\*

This is a comparative study of forest exploitation in Java (Central and East Java in this article) and two mountain villages in Japan, focusing on shifting cultivation. Rapid deforestation in Java, especially from the late nineteenth century, inevitably caused the decline of shifting cultivation in favour of more intensive agriculture on permanent farm land. In contrast to Java, forest still occupies two-third of Japan's area, and shifting cultivation could be seen in many parts of mountain areas until the early 1950s. How should we understand these circumstances? It is easy to attribute the situation in Java to a rapid population increase which forced people to open up forests. However, this is not persuasive when we think that Japan also experienced a rapid population increase but still retains a much larger proportion of forest area. In fact, population increase itself can be considered to be a result of historical processes and natural conditions.

In the case of Java, three points require special attention. First, in order to increase rice production, the Javanese rulers consistently tried to open up forest as permanent farm land, in part because exportable forest products were not greatly abundant in Java. Second, Dutch colonial policies, especially the Cultivation System and the subsequent Liberal Policy, were directed to the use of land in Java in the form of permanent farm land, not as forest. Third, and perhaps most importantly, the high fertility of soil in Java has made it possible for peasants to convert forests into more productive farm land without causing serious erosion provided water would be secured. This natural condition supported the population increase.

Japan has quite different historical and natural conditions from Java. Mountain villages in Japan have much less favourable natural conditions than those in Java: poorer soil, lower temperature, and often steep slopes. Under these conditions, there were two alternatives open for forest exploitation. One was shifting cultivation coupled with hunting and gathering activities. The other was to set up artificial forests for timber. Because of the constantly high demand for timber for housing in Japan, this latter course was also advantageous. In neither case did people in mountain areas in Japan convert forests into permanent farm land like in Java, but preserved them for shifting cultivation and growing trees for timber. We will examine these two mountain villages as examples of these two types of exploitation.

---

\* 八千代国際大学政治経済学部；Faculty of Politics and Economics, Yachiyo International University, 210 Aza Matsubara Makino, Yachiyo City, Chiba 276, Japan

## はじめに

本稿は「海域世界の森と海——21世紀の東南アジアと日本」と題するテーマの一環として、ジャワと日本における森の世界を森林利用と焼畑に焦点をあてて比較・検討することを目的としている。ジャワも日本も海に囲まれ、元来は豊かな森に覆われていたという点で共通しているが、両地域を森林利用と焼畑を通して比較することは奇異に映るかもしれない。というのも、一般的にはジャワも日本も稲作を中心とした集約的農業の代表的地域と考えられているからである。しかしこれは、近現代の状況を念頭に置いた時の問題であり、歴史をさかのぼれば両地域とも森と深くかかわってきた社会であったことは間違いない。この意味で、両地域が森をベースにしていかなる生活の仕組みを作ってきたのか、それがなぜ、どのように変化したのかを比較することは興味深い問題である。この問題の背景をもう少し詳しく説明しておこう。

中・東部ジャワにおいても20世紀初頭までは焼畑が行われていたが、19世紀後半以降の焼畑は山地においてさえジャワを代表する基本的な農業形態というよりはむしろ「生き残り」的存在であった[大木 1987]。この背景には、19世紀後半からジャワの森林が激減し始め、20世紀初頭までには大規模な常畑への転換が行われ、焼畑を行う森林そのものが激減してしまったという事情がある。一方、日本の山間地域において焼畑は1950年代まで各地でみられた。単純に比較すると、焼畑はジャワよりもむしろ日本の方が後まで存続したのである。そして、日本の森林面積は現在にいたるまで67パーセント台を維持している。つまり日本ではジャワとは異なり、焼畑から常畑への転換という直線的な経過をたどらず、森林は別の利用のされかたで存続することになったのである。

ジャワにおける森の衰退という事態は注目に値する。リード (A. Reid) は交易の時代(1450-1680年)の東南アジアの地理的特性を「水(海)と森」と規定したうえで、東南アジア世界を比喩的に、穏やかな海と周辺に豊かな森をもつ「東南アジアの地中海」と表現した[Reid 1988: 2-3]。言うまでもなく、東南アジアの海が重要であったのは、それを囲む豊かな森と林産物があったからである。この豊かな森がなぜジャワから消え、焼畑が日本より早く衰退してしまったのだろうか。ジャワと日本では森の利用方法や焼畑のあり方や性格に違いがあったのだろうか、それともたんに衰退の時期が異なっただけなのだろうか。これらは非常に興味深い問題であるが、これらの問いに本格的に答えるためには、焼畑の問題だけでなく、ジャワと日本における社会経済の歴史や住民の生活環境全体の比較を行う必要がある。しかしこれらの問題の詳細な検討は別の機会にゆずり、本稿ではかかる背景を念頭に置きつつ、焼畑を一つの独立した農業形態としてよりも、森林利用の一形態として考えるという観点から問題点を整理するに留めたい。なお、本稿では特にことわらない限りジャワとは中・東部ジャワを指すことをことわっておく。

## I ジャワの森林利用と焼畑

本論に入る前に、ジャワにおける森林の減少過程をみておこう。筆者はすでにジャワにおける森林の減少とそれによる住民生活の変化について詳しく記述してあるので〔大木 1988〕ここでその詳細は繰り返さないが、この減少過程はきわめて大ざっぱに次のように要約できる。オランダ東インド会社時代からイギリス統治期（1811-1816年）を経て「強制裁培制度」期（1830-1870年）に至るまで、一部に消滅した森林はあったものの、ジャワは全体としてまだ森に覆われていた〔Eyken 1909: 4; Ham 1908: 254〕。「強制裁培制度」期にはかなりの森林伐採が行われたと思われるが、それでも1870年代中葉にはまだジャワ全土の70パーセントほどが森林に覆われていたと推定される。当時の耕地（不定期耕作地も含む）面積は全体の16.5パーセントであった〔Soest 1874: 280〕。

ジャワの森林は、1874年以降激減に向かったようである。正確な数字は分からないが、筆者の推定では1905年時点で耕地は35パーセントへ拡大したのに対して森林面積は35～40パーセントほどに減少したと思われる〔Ham 1908: 203-205〕。森林の統計が比較的正確に得られるようになる1930年の状況（表1）をみると、森林面積（政府直営農園は除く）はジャワ全土で約20パーセントしかなかったのである。そして、王侯領を含む中・東部ジャワだけをみると、この比率は21.6パーセントであった。こうなると、焼畑を含む、森林を基盤とした生活の仕組みを維持することは不可能である。森林が減少する一方、住民の耕地はジャワ全土で約59パーセント、西部ジャワを除き王侯領を含む中・東部ジャワではこの割合が66パーセントへ激増したのである。とりわけ王侯領の状況はすさまじく、森林はわずかに7.7パーセントに落ち込んでいた。

ジャワにおけるこの間の事情については、人口増加→森林伐採→耕地の拡大という図式が一般的には無条件で受け入れられており、これらの因果関係が改めて問題とされることはなかった。しかし、なぜジャワだけが突出して人口の急増が生じたかは必ずしも明らかではない。通常、生産技術や生活手段の改善、種痘を含む衛生条件の改善、植民地政府による平和（pax

表1 ジャワの森林比率（1930年）

| 地 域   | 森林面積比率 | 森林面積（100人当たり） |
|-------|--------|---------------|
| 西ジャワ  | 16.5%  | 6.78 ha       |
| 中部ジャワ | 20.8%  | 5.26 ha       |
| 東部ジャワ | 24.8%  | 7.89 ha       |
| 王侯領   | 7.7%   | 1.72 ha       |
| ジャワ全体 | 19.9%  | 6.28 ha       |

資料〔Zwart 1939: 382〕の表より作成。

neederlandica)などがその理由に挙げられる [坪内 1986: 25-26] が、これらはジャワだけに当てはまるわけではない。しかも人口増加が生じたために、現実に森林を食いつぶしてしまったのはジャワだけである。この背景には、極めて複雑な自然的、歴史的要因があるものと思われる。ここではまず、ジャワ人が森林をどのように利用してきたかを検討しよう。ただし、これまでジャワにおける森林利用の歴史的研究はないので、以下の記述は現段階では仮説の域を出ないことを予めことわっておく。まず林産物の利用からみてみよう。

今日我々はジャワを「森の世界」としてイメージすることは困難である。この理由の一部は、ジャワの歴史を通じて、この地域の輸出品の中に重要な林産物があまり含まれていない、という点に由来する。森がまだ豊かにあった古代・中世の輸出品の中で、ジャワ産であろうとおもわれる林産物は非常に少なく、わずかに蘇方（染料）、ジャワ胡椒、しょうずく、ジャックフルーツなどが挙げられるだけである [Jones 1984: 26-32; 石井・桜井 1985: 70, 86]。そして、少なくとも8～9世紀にシャイレンドラ朝が島嶼部の海上交易に全面的に乗り出したころには、ジャワが米と交換に東インドネシアの香木やスパイスを得て海外へ輸出するという基本的な交易構造ができあがっていたようである [Hall 1985: 113]。

しかしジャワの大部分が森に覆われていた時、ジャワ人は森からさまざまな有用林産物（食料、生活物資、輸出用林産物など）や森に棲む動物などを得ていたはずである。ジョーンズ (A. M. B. Jones) は10世紀までの碑文に現れる動植物名、食べ物、職業などを分類したリストを作成しているが、それらの中で、森林と関係のあるものを幾つか挙げておこう。儀礼の際の食べ物、飲み物の多くは魚介類であり、ジャワはやはり「海の世界」に属しているとの印象を与える。その中で、林産物そのものとしては登場しないが、肉類ではアヒル、鷺鳥、鶏、水牛、山羊など家畜と思われる動物の他に、猪、鹿、猿といった野生の動物が見いだせる [Jones 1984: List 5]。また、バンテン (banteng) と呼ばれる野牛も狩猟の対象となっていた [Reid 1988: 33]。もちろん、これらを一般庶民が日常的に食べていたとは考えられないが、それでも人々と森との密接な関係を示唆している。なお「手工業および他の活動」というタイトルのついたリストには、「動物および鳥を罠で捕獲する」あるいはたんに「罠で捕獲する」という項目がある [ibid.: 49]。

以上はあくまでも儀礼用の食べ物であるが、ココナツ、バナナ、ドリアン、マンゴー、ランブータン、ジャックフルーツなどの果物が日常生活で消費されていたことはいうまでもない [ibid.: 30-31]。ジョーンズは「929 A. D. までの碑文に現れた植物、樹木・花の名前」というタイトルのリストも作成している。その中でジャワの住民が利用していたと思われる樹木や林産物が幾つか含まれている。すなわち白檀（ジョーンズは当時東ジャワにも生えていた、と注釈している）、舟の建材となる木、葉をタバコとしてまた麻酔として用いる木、薬用の油を採る木、染料と葉を採る果物をつける木、マンゴー、魚を獲るための毒として使う木などである

[*ibid.*: 52-56]。これらの他にも多数の森林産物を利用していたことは疑いえない。いずれにしても10世紀には森林が住民にとって狩猟採集の場であったことは確認できる。

米を媒介として香料・香木を中心とした熱帯産物の取引を掌握するというジャワの交易構造は、シャイレンドラ朝以後もますます強化されていった。多くの碑文は、権力者たちがいかに米作の拡大、米の増産に努めたかを如実に示している [Hall 1985: 128-134]。13世紀末に成立したマジャパヒト王国も、王都周辺に大規模な灌漑施設を伴う大米作地を造るなど、米の増産に努めた [大木 1986: 24-30]。このような状況を考えると、少なくともジャワの権力者にとって森林とは富をもたらさないもの、という意識が強かったのではないだろうか。14世紀に編纂されたマジャパヒト王朝期の年代記『ナーガラクルターガマ』には、森を表わすウォノ(wana)は12カ所、アラス(alas)は5カ所出てくる。そのうち5カ所ほどが森に対する評価を含んでおり、いずれも否定的である。たとえば、牛車で王が巡行の途中に森にさしかかると、森には猪、鹿、黒いアンテロープがおり、行く手を脅かす、などと記されている [Pigeaud 1960: 62]。かかる表現は、王都または王が直接支配していた地域は森が切り開かれていたが、その周囲には権力の及ばない森がまだあり、権力者はその存在に脅威を抱いていたことを示唆している。

王侯貴族は別として、住民が林産物をどのように利用していたかについてはマジャパヒト期(1294-1478年)においても、それに続く、1580年代初頭に成立したマタラム(Mataram)王国以降の歴史においても資料で確かめることは困難である。ただ、森林が豊かにある所では、住民はすでに挙げた動植物を狩猟・採集していたものと思われる。オランダによる植民地期にも、住民がいかなる林産物をどのように利用していたかは、森から薪を得ていたことを除いて分からない。高谷氏は、「ジャワでも昔、森が広く、まだ森林植物に頼れた時には、おそらくルアと同じように森の植物を十分利用して生活をしていたのであろう」が、「森が貧弱になって来ると、プカラガン [屋敷地園地——筆者注] は森の肩代わりという形で発達してくる」と述べている [高谷 1985: 172-173]。こうした可能性は十分あるが、これを実証的に確認することは将来の課題としたい。次に、林産物を直接利用するのではなく、森林の再生能力を利用する焼畑についてみてみよう。

筆者はすでに植民地期中・東部ジャワにおける焼畑の実態を記述してあるので [大木 1987]、ここでは植民地化以前の焼畑の様子と植民地期における衰退過程を概観するに留める。ただし、植民地期以前の焼畑のあり方を直接に知る資料が得られなかったので、ここでは後代に書かれた二つの記述を手がかりに、推測をまじえてこの問題を考えることにする。第一は、19世紀前半に観察された、東部ジャワのテンゲル(Tengger)山地に住む、いわゆるテンゲル人の焼畑についての記述である。彼らは固定的な村落を形成せず移動しながら焼畑を営んでいたため、オラン・ブルン(orang burung:文字通りの意味は「鳥のような人々」と呼ばれた

[Sevenhoven 1838: 233-234]。1810年代の初めにこの地を訪れたホルスフィールド (T. Horsfield) によれば、この山地の麓は非常に肥沃で稲田が広がりチーク林もあるが、山の上の方では彼らが大量の雑穀 (millet) を栽培し、付近には薬草、野菜、根菜類が豊富に繁茂していた [Horsfield 1814: 6-8]。彼らの常食は米ではなく、トウモロコシを含む雑穀であった。彼らはヨーロッパ人が18世紀にもたらしたジャガイモ、キャベツ、タマネギなどを栽培し、それらを低地のココナツ油、米などと交換していた [Anonymous 1844: 17-18; Hoëvell 1853: 142-143; Stibbe 1921: 298-308]。以上のような記述は、まさにテンゲルの人々が森とともに生活していた「森の民」であったことを如実に物語っている。それでは、テンゲルの人々はジャワにおける特殊な存在なのだろうか。この点だけを若干補足しておきたい。

テンゲルの人々はマジャパヒト王国が崩壊してイスラムのマタラム王国成立時に、イスラム支配を嫌って山に逃れた人々であるといわれている。19世紀半ばにこの地を訪れた地理学者フーフェル (W. R. van Hoëvell) によれば、当時彼らは15世紀以前のジャワ人の信仰や社会生活を維持していたという [Hoëvell 1853: 142-156]。テンゲルの人々がいわゆる「ジャワ人」であるか否かは別として、筆者は彼らの生活が他の中・東部ジャワでは全くみられない、極めて例外的なケースであるとは思わない。むしろ同じ中・東部ジャワの生態環境のもとでは、他の地域においても上記のような森をベースとした生活を営むジャワ人がかなり広範にいたと考える方が自然であろう。ただし、こうした焼畑民は権力の直接支配を受ける程度が少ないので、支配者の側で作られる歴史資料にはあまり登場しないのではないだろうか。

第二は、1880年代にジャワの森林調査をしたコルデス (J. W. H. Cordes) が残した、焼畑の利用に関する次のような興味深い記述である。重要な部分を仮訳しておこう。

東モンスーン、すなわち乾季にアラン・アランの原野を焼くことは、古い時代からのジャワ人の主要な欠点であった。平地においてはこれ〔原野を焼くこと〕は、土地を切り開き、交通を容易にし、野獣を狩猟し、屋根ふき材や家畜飼料用の古いアラン・アランの葉を再生させるなど、さまざまな目的から、あるいは場所を特定しないでたんなる好みで行われた。しかし、不注意から、薪となる木も燃やしてしまうことしばしばである。

これに対して山地ではこれらの目的はなく、そこで(山を焼くこと)の唯一の目的は周期的に耕地するために、燃えた草や藪が燃えた後の灰を肥料として利用することである。

[Cordes 1888: 933-934]

コルデスがこの情報をどのように入手したかは分からないが、おそらく調査の過程で住民から聞いたのであろう。また、「古くから」とはいつ頃からなのかもはっきりしない。これらの不明確さをもちながらも、上記の記述は幾つかの点で示唆的である。まず、ジャワの平地地域

では乾季の「野焼き」が慣行化しており、山地では焼畑がかなり一般的であった。次に、森林の伐採により草地を作り、狩猟やアラン・アラン (alang-alang 茅の一種) の採集など、過去におけるジャワ人と森との密接な関係を示している。もっとも、このような草地は耕地としても利用されたであろうし、平地だけでなく山地にも見られたと考える。というのは、19世紀末のクドゥス (Kudus) 州の山地でも、森林を伐採してアラン・アランの草地とし、それを刈り取って家畜飼料や屋根ふき材として利用しつつ、同時にそこで陸稲やトウモロコシを、1年耕作2年休閑という形で栽培していたからである [Veth 1903: 468]。筆者は、上記のような林野の利用方法をジャワに古くからある焼畑の一種であると考えている。野焼きについては本稿第Ⅱ節の2で日本の事例を検討するので、その際もう一度この問題に触れる。

さて、18世紀末から19世紀初頭にかけて中・東部ジャワの北海岸地域の低地部では、開墾後2年目には極端に収量が落ち3年目には全く収穫できなくなってしまうので1年間休耕にするが、再び収量が減少してしまうような稲作がかなり広範にみられた。しかも、グレシク (Gresik) やシダユ (Sidayu) のように、こうした収量の減少の後農民が耕作を放棄して家族ぐるみで移動してしまうこともしばしば起こった [大木 1986: 33-37]。資料にはっきりと記されているわけではないが、かかる稲作は短期休閑作または焼畑であったと考えられる。そしてその実態はコルデスが紹介した、草地や藪を焼いて行う短期休閑作や焼畑による陸稲耕作であった可能性が高い。筆者は、18世紀には焼畑と野焼きによりジャワの低地地域の森林が大規模に開墾されていったのではないかと推測しているが、この検証は将来の課題としたい。

ジャワがイギリスの統治下に入った1810年代から1830年代までの記録では、ジャワはまだ深い森に覆われ、住民は森から薪や建材その他を得たうえで、森の一部で焼畑を営んでいた [Anonymous 1842: 201-202]。しかし「強制裁培制度」の導入は、それまでの焼畑のあり方に大きな変化をもたらした。森林が多く残っていた山地ではコーヒーやキニーネなど樹木性作物を栽培するために森が大規模に伐採された。これにより森林の開墾に大きなはずみがついた。そして「強制裁培制度」が事実上廃止された1870年頃以降には、放棄されたコーヒー栽培地に、付近の住民だけでなく他の地域からも人々が入り込んで焼畑を始めたのである。かかる焼畑の状況は、ジャワの森林が減少していった経過を考えるうえで示唆的である。たとえばマディウン (Madiun) 州ポノロゴ (Ponorogo) 南部の山地の場合、約7万ヘクタールの森林が次々とコーヒー栽培のために伐採されていったが、農民は1865年頃からコーヒー栽培は放棄し焼畑に利用した。土地は火入れ後1～2年耕作に使われ、2～3年放置されるという短期休閑作が行われた。こうした耕作が繰り返されるうちにかつての森林は消えて草地となり、耕地としてではなく毎年火入れを行う牧草地として利用されるようになった [Cordes 1888: 936]。マディウン州の他の地域でも同様の状況が生じた [Anonymous 1895: 87-89]。こうして生じた草地が永久に不毛の地となるのか、あるいは畑や水田になるのかは、その土地の肥沃度その他の自然条件や

農民の土地需要により異なったコースをたどったであろう。いずれにしても、19世紀後半以降の焼畑は森林の生産力を長期的なサイクルで利用する農業というより、開墾の手段として臨時的に活用された側面の方が強い。

本項の最後に、ジャワの焼畑でどんな作物が栽培されていたかをみておこう。佐々木氏はジャワの焼畑を「オカボ卓越型」に含めているが〔佐々木 1988: 17-27〕、これは最近の状況を念頭に置いた分類であろう。植民地化以前の焼畑で何が栽培されていたのかは必ずしも明らかではないが、以下に、歴史的変化も念頭に置いてみてみよう。テンゲルの例から推測すると、ヒンドゥー期には雑穀、根菜類を主体とする焼畑があったことはまず間違いない。さらに、資料では確認できないが陸稲も栽培されていたのではないかと思われる。19世紀初頭の記述は、当時ジャワの焼畑では陸稲も栽培されていたことがわかる〔Anonymous 1854: 18, 25〕。19世紀後半以降になると、もう少し詳しい様子が分かる。たとえば先に触れたポノロゴの焼畑では陸稲、トウモロコシ、カッサバ、ジャラック (jarak=ひま, あるいはトウゴマ) が栽培され〔Cordes 1888: 936〕、スラバヤ (Surabaya) 州南部の山地地域アルジュナ (Arjuna) やプナンガン (Penanggungan)、あるいはクドゥスの山地地域ではコーヒー園の跡地で陸稲とトウモロコシが焼畑により栽培された〔Anonymous 1917: 154; Veth 1903: 468〕。19世紀末から20世紀初頭の焼畑を全体としてみると圧倒的に陸稲の比重が大きかったが、上記のトウモロコシ (18世紀にインドネシアにもたらされた) を雑穀と読み替えて全般的状況を要約すれば、ジャワの焼畑ではテンゲル的な「雑穀中心型」から「雑穀・オカボ型」ないしは「オカボ卓越型」へ移行した、と言えるのではないだろうか。そしてこの背景には、商品作物としての米の重要性がヒンドゥー期以降一貫して高まったという事情があったのではないだろうか。

## II 日本の森林利用と焼畑

日本において焼畑は沖縄から東北まで日本各地で、基本的な農業形態としてジャワよりもずっと後まで見られた。本節で取りあげる豊根村も朝日村もほとんど平地のない純山村で、歴史のある段階までは焼畑、狩猟・採集など、森をベースとした生活を組み立ててきた。しかし両村は、森林の利用の仕方、焼畑の内容および盛衰の時期がかなり異なる。豊根村については雑穀栽培の焼畑を含む複合的な森林利用の問題を、朝日村については比較的最近まで行われていた狩猟・採集を中心に、焼畑わらび栽培についても検討する。ただし日本の焼畑については、野本〔1988〕ほか、焼畑の種類、作物、作業、文化にかんする詳細な研究が多数あるので、ここでは森林利用の方法という側面に焦点を当てることにする。



## 1. 豊根村の複合的森林利用

豊根村は愛知県の北東端に位置し、東は天竜川（佐久間ダム）、北は長野県下伊那郡に接する純山村である。南東部の佐久間ダム方面を除けば、村の大部分は標高1,000メートル前後の山々に囲まれ、平地はほとんどない。村内には天竜川の支流の大入川および多数のその支流が流れている。年平均気温は摂氏11.5度と冷涼な気候である。平成3年4月1日現在、豊根村は面積約120 km<sup>2</sup>、人口1,760人の林業を主産業とする過疎村である。豊根村では明治20年頃までは盛んに焼畑が行われていたが、その後急速に衰退し、現在焼畑を直接経験した人は村にいない。幸い、最近出版された『豊根村誌』全3巻〔安藤 1989〕は、江戸時代からの文書類、古い絵図（復刻）などの資料を収録している。本稿ではこれを主たる資料として利用する。

古代、中世における豊根村について詳しいことは分からない。この地域の人々の生活の様子がおぼろげながら明らかになるのは江戸時代に入ってからである。延宝年間に入ると(1673年)、幕藩は日本各地で新田開発を奨励し、この地域でも新田開発が進展した。こうした変化を踏まえて延宝6年(1678年)に豊根村に対して検地が行われた。検地の記録から当時の様子を描くと次のごとくである。江戸期には現在の豊根村は13の村からなっていた。延宝検地のころの村の様子は、たとえば間袋村（本来は旧間袋村と表記すべきであるが、特に紛らわしい場合を除き「旧」を省略する）の場合、家数25軒、人数156人が本郷（本村）と5カ所の枝郷（枝村）に別れて生活していた。このあたりの畑は「軽土黒ぶく石砂交じり」の山畑で、枝郷の開発は「そうれ」（焼畑）に強く依存していた。百姓の持ち山は15カ所あり、そこでは「雑木立ニテ二十ヶ年ニ一度ツム焼畑に仕粟稗作」という状態であった。柴草は「作山の内」で刈り取ってきて、「地方肥し」にした。農間余業は「男は猪鹿除垣拵、薪取、女は木の根、茶葉等取、夫食足合ニ仕、其余着用の藤布を織」と、記されている〔同上書: 100〕。以上の記述は近世初期の豊根村の様子を知る手がかりを与えてくれる。ここではさしあたり次の3点について検討しよう。

まず第1点は、この地域では村の形成に焼畑が深くかかわっていたことである。おそらく最初のうちは出造り小屋が数軒集まって小さな集落（枝郷）を形成していったのであろう。近世の豊根村では本郷と複数の飛び地的な枝郷から成る村々が交錯していた。しかも、一つの枝郷には必ずしも同じ本郷の出身者だけでなく、他の本郷から来た人々も交じって住み着いたので、一見してまとまりのある村落景観も、実際にはそこには複数の村（本郷）に所属する家が混在していたのである。この一例を図で示すと図1のごとくである。ここで重要な点は、本郷も枝郷も入り交じっていたため、周辺の林野はいわゆる「入会」として共同利用されていたことである。このような共同利用の山は「惣有山」と呼ばれ、「そうれ」（焼畑）に利用された。入会には複数村落の共同利用の場合と、単一村内での共同利用（村中入会）の場合とがあった。

第2点は、焼畑（そうれ、そうれ切山）が20年周期で耕作され、その主要な作物は粟、稗で

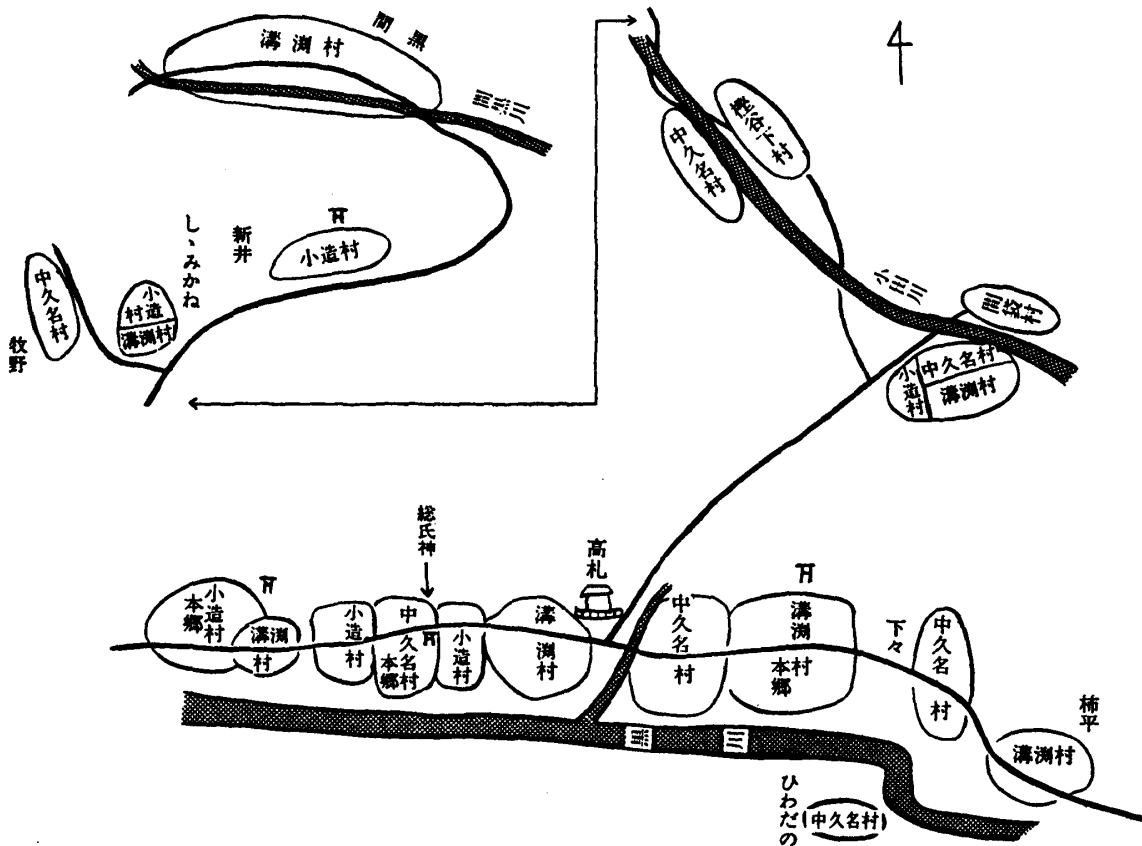


図1 小造, 中久名, 溝瀆村の入混り状態 (天保13年, 1842年) [安藤 1989]

あった。延宝検地に関しては13カ村のうち10カ村分しか分からないが、それによれば、田の面積は7町7反1畝11歩、畑は74町7反3畝27歩であった。なお、水田が全くなかった村が10カ村のうち3カ村あった。新田開発にもかかわらず、当時はわずかな水田しかなかったのである。当時の10カ村の人口を1,500人ほどと考えると、田に畑(常畑)を加えても、これらだけではとうてい生活できない。したがって当然林野に依存することになる。林野については、「但し場広く候故検地不仕候」とか「村中薪取場高山場広く御座候故検地不仕候」と記されており、検地の対象にならなかった[同上書: 112; 愛知県 1970: 24]。ただしこの検地帳には村ごとに「それ切山」と「山」の箇所数が示されている。現在確認できる9カ村についてみると、「それ切山」計86カ所、「山」が45カ所と記録されている[安藤 1989: 136]。ここで「山」とは薪、干草、柴、<sup>まぐさ</sup> 稜などを採る作山で、これも「村中入会」で村全体の共有であった。藩は焼畑の存在を知ってはいたが、山の奥にある不定期耕作地を確認することもできず、実際には「山が高く広すぎるため」検地は行われなかった、つまり焼畑は租税の対象にはならなかったのである。焼畑に対するこのような上級権力の扱いは本稿で述べたジャワの場合と同じである。

第3点は、農作業が暇な時の仕事として挙げられている活動は、当時の生活全体のあり方を

象徴的に表している。まず男の仕事として猪や鹿の侵入を防ぐ垣根を作ったという点であるが、これは住居に近い田畑ではなく、集落から遠い焼畑地で作物がこれらの動物に荒らされないように垣根を作ったことを指しているのであろう。記録では、ただ獣害から作物を守ることだけが強調されているが、実際には猪、鹿をはじめとする動物の狩猟も行なっていた。豊根村で明治初年まで行われていた「鹿うち神事」、豊根村を含む中部三信遠地域の「シシうち神事」は、これらの動物の狩猟を儀礼化したものである。害獣駆除を兼ねた動物の狩猟は、蛋白源の確保という意味でも重要であり、焼畑文化圏に共通する活動である〔野本 1988: 493-496〕。いうまでもなく猪と鹿は代表的な動物であり、狩猟の対象としては他に、この地域に棲息する兎、ツキノワグマ、ニホンカモシカなどがあつた。ちなみに、豊根村内の旧「兎鹿嶋村」という名称はこれらの動物の狩猟を行なっていたことを示唆している。昭和40年の村内産業別就業者数統計に、第1次産業1,040人（全体の62.7%）のうち農業が830人で、林業、狩猟が210人と記載されている〔愛知県 1970: 15〕ことから分かるように、狩猟は当時でさえ村の経済活動の一角をなしていたし、現在でも村内には猟をする人は珍しくない。この他動物では鳥類、ハチの子、アメノウオ（＝アマゴ、ヤマメと同種）などの川魚の捕獲をした。次に男の仕事としては「薪取」があつた。これは地面に落ちた小枝を集めるというものではなく、かなり太い枝や木を切り倒し、下に降ろし、切断するのでかなりの重労働であり危険な作業であつた。そのため、これを経験した村人によれば、通常男たちが共同でこの作業を行なったとのことである。なお、薪取りだけでなく炭焼きも当時の男の仕事であつた〔同上書：51〕。

女の仕事として「木の根」を採集し茶の葉を摘んだことが記されている。ここで「木の根」とは、文字通り何か具体的な植物の根（山いも、やまごぼうなど）だけでなくワラビ、ゼンマイ、フキ、タケノコ、きのこ類などの野草や山菜、それに山栗、栃・樫・桑の実、あけび、山ももなどの果物を含む林産物や野生植物など、自然の食料を象徴的に指しているのであろう。なお、茶は栽培植物であり、村内で消費されると同時に村外に出す換金作物でもあつた。当時すでに茶の栽培が行われていたことは、林地の新しい利用方法として注目に値する。食料以外では、藤蔓を山から採り、それで衣服を織っていた。その製法は次のごとくであつた。春に真藤を3尺（1メートルほど）くらいに切り、たたいて皮をむき釜に入れ、灰と水を加えて蒸した後、川で晒して糸に紡ぐ。この糸を目の粗い箆を使い高機で織りあげた〔安藤 1989: 570〕。なお、豊根村では古くから漆の採集を行なっており、延宝元年（1673年）納入済公租の中には銀の他に大豆と漆代銭が「山見取」の名目で含まれていた〔同上書：118〕。なお、天然のものか植林したものかは分からないが、豊根村では柿も重要な林産物であつた。柿は食料にするだけでなく、和傘などの紙の防水補強材となる柿渋の原料としても重要であつた。以上、延宝検地の記述から見られる当時の様子を補足しつつ説明したが、次に「そうれ」（焼畑）と「山」について説明しよう。

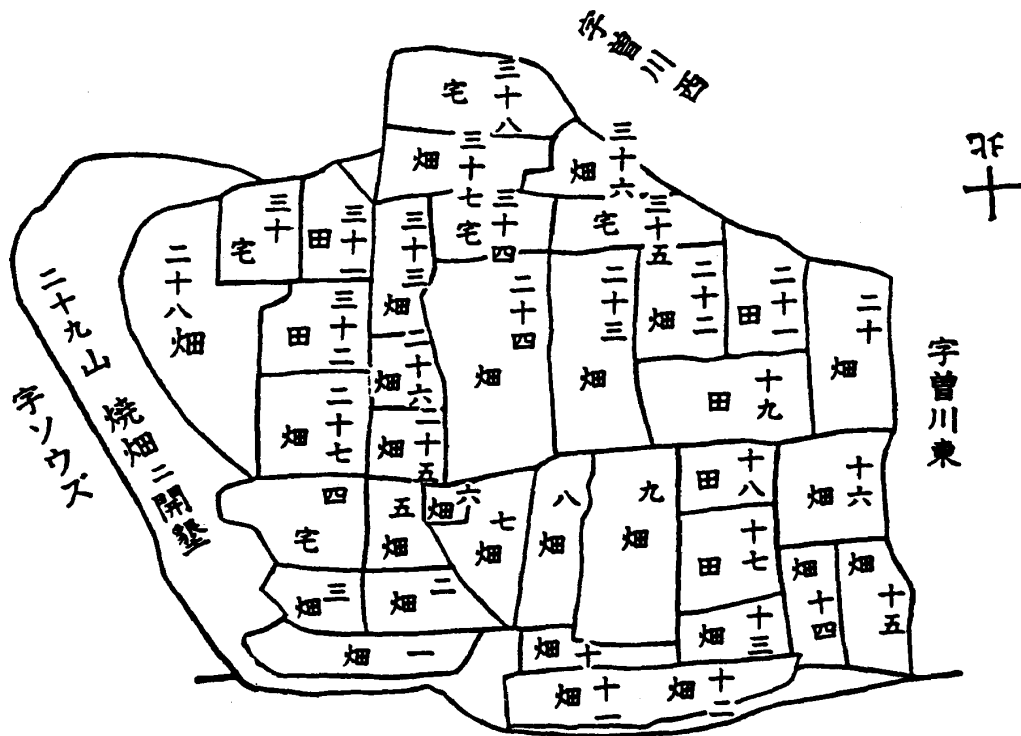


図2 古真立村字曾川西の焼畑地 (明治16年) [安藤 1991: 106]

江戸時代の具体的な焼畑の姿は分からないので、明治期の様子を示すことにする。まず焼畑地の状況であるが、個々の焼畑地は独立しているわけではなく、字単位の大きな焼畑区画に1番山から38番山くらいの小区画があった。これを古真立村字曾川西の事例で示すと図2のごとくである。この村については13の字の焼畑絵図が残っているが、図2はそのうちの一つである。図2にはないが、他の焼畑絵図には「耕地」と記されたところがある。これは焼畑から常畑に変えた土地であろう。豊根村の焼畑には、第一年目にソバを作る場合と、アワ、ヒエを作る場合と2通りあった。前者の場合には春から秋にかけて木を切り、盆の前後に火入れした。後者の場合11月から12月にかけて森林の伐採が、1月から5月にかけて火入れが行われた。火入れの時期に大きな差があるのは、春先の温度が村の南部と北部とでは大きく異なっていたためである。そして、豊根村全体では後者が普通であったので、以下後者について説明する。ただし、佐々木氏の言うように、焼畑の火入れ、焼き払いの方法は日本、東南アジア、南アジアでほとんど変わらないので [佐々木 1988: 94]、ここでは要点を示すに留めたい。

まず伐採であるが、予定地に行き、小さい木は根本から切り倒し、ひと抱えまたはそれ以上の大木はよじ登って、下から枝を払う。こうして枝と葉を乾燥させて翌春に火入れを行うのである。火入れは好天の乾燥した日を選び、正午すぎから3時間ほどをめぐりに焼いた。その際、3～4家族の共同で作業をする相互扶助の形をとった。火入れの際、三沢地区では近くの山の山頂に上って「秋葉山」を拝み、近くの木の根に米を振りまいた。こうした儀礼は元来どこの

地区でも行われたのであろう。火入れは防火のため6尺幅の空き地帯を作り、上部から点火する。火は燃えつつ下方に退くのでこれを「さすり火」と言う。延焼の恐れがないと判断すると下方から火を放つ。これを「おったて火」という。燃え残りの残木はもう一度集めて焼かれる。種蒔きは一雨あって灰が湿った時が良く、ばら蒔きし畝立てしない。一年目の焼畑は「あらはた」、二年目は「かえし」と呼ばれ、3～4年で畑を山に戻した〔同上書：388-389；愛知県1970：33〕。表2は下黒川と三沢地区の事例である。表の中の馬鈴薯は明治期以前にはなかった作物である。明治期の1農家当たりの経営面積は3町歩（約3ヘクタール）ほどであったが〔佐々木1988：384〕、作物構成から見るかぎり豊根村の焼畑は佐々木氏の分類に当てはめると東南アジアの照葉樹林帯に広く分布する「雑穀栽培型」であるといえる〔同上書：72-73〕。ただし豊根村では里芋を毎日のように食べ、どの家にも芋洗い専用の桶があったと言う〔安藤1989：576〕。焼畑作物の中に里芋は含まれていないが、食生活における里芋の重要性、江戸末期に小柴立を焼いて里芋を栽培していたこと（後述参照）から推察して、雑穀中心になる以前には里芋のような根菜もかなり重要な焼畑作物であったのではないだろうか。<sup>1)</sup>次に「山」についてみてみよう。

延宝検地のころには「山」は入会地として村の惣有であり、焼畑以外のさまざまな目的に使われる林野を一括して「山」と呼んだ。しかし元治二年（1865年）、8カ村連盟で代官所に提出した「御船材并炭焼伐出木品有無書上帳」によれば、その管理に変化がみられた。たとえば兎鹿嶋村の場合、村持山（総山）「山九か所」10町歩が記され、その内訳は、秣場3カ所（3町歩）、干草場2カ所（3町歩）、薪山2カ所（1町歩）、小柴立山2カ所（3町歩）であった。これらのうち秣場と干草場には立木がないこと、薪山には雑木ばかりであり、小柴立山では年年焼き払ってソバや里芋を栽培しており、船材や炭焼き用の立木など幕府が要請する有用木が存在しないことが強調されている〔同上書：140〕。これは代官所への報告であり、多分に過小

表2 焼畑作物（明治末期）

| 作付年度 | 下黒川      | 三沢     |
|------|----------|--------|
| 1年目  | ヒエ       | ヒエ、アワ  |
| 2年目  | マメ       | アズキ、マメ |
| 3年目  | アズキ      | アズキ、マメ |
| 4年目  | ソバまたは馬鈴薯 | 作付せず   |

資料 〔安藤1989：389〕

1) ちなみに、豊根村の畑作物は、寛政10年（1798年）の記録によれば、稲、麦（大麦、小麦）、芋、大根、稗、大豆、小豆、ソバ、粟、黍、久平芋（つくね芋？）、なす、ささげ、ごぼう、えんどう、藍などがあり、さらに「小物」として、こんにゃく、しょうが、辛子、みょうが、らっきょう、えごま、かぶらなどが少しずつ栽培された。ただしこれらは主なものだけで、実際にもっとあったようである〔愛知県1970：25〕。

評価されている。

実際には上記の他に萱立山があり、屋根の葺き替え用に備えて萱山を決めて毎年刈り取り備蓄していた。また、漆立山は漆畑、漆林とも呼ばれたが、これは年貢の一部として、野生の漆とは別にどの村でも栽培した。栃林は、栃の実を食料として利用するために、全ての村で植林していた。そして、たんに「立山」といえば、杉、桧、松、榎、栗、栃、樅、槇などの用材林または椎茸栽培林を指した。このように、入会林野は江戸末期にも維持されていたが、次第に明確な目的を持ったかたちで維持管理されるようになっていた [同上書：141；安藤 n.d.]。なお、豊根村には山で木工製品を造る木地師がおり、彼らが利用していた山は木地山と呼ばれた。木地山は現在でも山の名前として村内に残っている。ただし本稿では、このような森林利用者がいたことを示すだけに留める。

以上、近世から明治期にかけて豊根村の人々が森とどのようにかかわってきたかの概略を示した。上記期間までの豊根村の生活は森の再生産力を利用した焼畑と、森が生み出す富の一部を直接利用する狩猟・採集との結合によって成り立っていたといえる。しかも森林の利用方法が非常に多様で複合的であった。しかし江戸末期になると、豊根村のように交通不便な奥山にも、幕府は船、薪炭（おそらく建築も）用材を求めて立木の報告をさせるようになり、森の利用方法も特定化するようになった。かかる状況の変化が明治期以降の豊根村の森林利用にも大きな変化をもたらすようになったのである。次にこの変化をごく簡単にみてみよう。

日本の、かつての焼畑地の大部分は現在杉や桧などの人工林に覆われている。この他常畑、茶畑、みかん山となったところも多い。今日の人工林も(1)焼畑から直接に杉山・桧山へ変わった場合と、(2)焼畑→桑畑→人工林、または焼畑→こうぞ・三桠→人工林などの経過を経た場合とがある。ここで桑、こうぞ・三桠を換金作物と読み替えても良い。豊根村の場合、これら全てが該当する。まず(1)の場合から見てみよう。

近世後半になると幕府直轄の御林が設定されるようになった。豊根村にいつから設定されたかは分からないが、宝暦13年（1763年）には坂場村と川宇連村の境にある両村の入会山に御林が設定されたことが記録されている。当時はまだ天然木の切り出しが目的であったが、その後次第に植林をするようになった。一方、木材の需要に対応して村内の有力者の一部が、それまでの焼畑耕作地などの林野を人工造林し、林業目的に利用するようになった。これは入会権の変質、崩壊という重要な社会経済的变化を伴ったが、ここでこの問題について言及する余裕はない。いずれにせよ、幕末から試行錯誤を繰り返しつつ始まった人工造林は、明治14年以降には植林の手引書も出回り本格化した。とりわけ日清戦争（1894-1895年）後の商品経済の普及と木材価格の上昇に刺激されて焼畑地の人工造林化が進み、日露戦争（1904-1905年）への臨戦態勢のなかで木材景気が豊根村にも波及した。こうして明治末からの拡大造林の過程で豊根村の焼畑は急速に衰退していったのである [安藤 1989: 391-392, 400-403]。

人工造林と共に、換金作物の拡大も焼畑の衰退の一因であった。豊根村では江戸時代からタバコ、藍、柿、茶、こうぞなどの換金作物を栽培していたが、これらの増産に加えて明治末から大正にかけて、椎茸、こんにゃく栽培が、そしてとりわけ重要な産業として養蚕が盛んになり、桑畑が拡大された。炭焼きや木材伐採の副業機会が多くなり、焼畑は大正期のはじめには一挙に衰退に向かったのである〔同上書：391；愛知県 1970: 39〕。しかしこうした換金作物も戦後には消え、現在では森林の利用はほぼ杉・桧の人工造林と椎茸栽培という、ごく限定された用途に特化してしまった。言い換えると、豊根村の森林利用は「モノカルチャ」化したのである。次に朝日村の森林利用についてみてみよう。ただし朝日村については調査の途中であり、ここでの記述は暫定的である。

## 2. 朝日村秋神地区における森林利用と焼畑わらび栽培

朝日村は、岐阜県北東部の大野郡に属し、北東に乗鞍岳、南に御岳山をいただく奥飛驒の山村である。この村は高山線の久々野から東、東南に広がる山村である。とりわけ秋神地区は、現在の村の中心よりさらに山奥の秋神川源流部に位置する地域である。昭和9年に高山線が開通する以前のこの地方は、周田から隔絶された環境にあったと思われる。村全体はかなりの高地にあり、しかも村内の標高差も721メートルから2,858メートルと大きい。昭和63年現在、朝日村の人口は約2,300人で、村の総面積 186.6 km<sup>2</sup>、うち94.8%を林野が占めている。そして本稿で扱う秋神地区は朝日村の最奥、御岳山麓北斜面に位置する山と溪谷の地である。秋神地区において、人々がどのように山や森林を利用して生活を築いてきたかをみてみよう。

明治初頭の秋神地区は、「秋神と唱来りし奥区御岳麓の七耕地は志高極寒の土地にして稲粟は不登、稗・蕎麦・大豆・黍・桑・麻に適し、其余は竹・漆・茶には難適」であり〔朝日村 1956: 249〕、また「古来稲は一粒も登らざれば抛なく雑穀を植えて（其も三郡の村々に比すれば秋成十分一にも當り難し）稗と麦との実を常食とし」という状態であった〔同上書：443-444〕。ここで「三郡の村々」とは飛驒の三つの郡を指し、山国飛驒の他の村々と比べても秋に収穫できる雑穀は10分の1しかなかったという。秋神地区でも焼畑は行われたはずであるが、記録にはあまり出てこない。貧しい土壌、急峻な山、厳しい寒さのため、山を農業的に利用するより森林としてその林産物を利用したほうが有利だったのかもしれない。かかる厳しい自然条件のもとでは、身の回りの利用できるもの全てを利用せざるをえない。昭和31年に編纂された朝日村の村誌は、秋神地区を含むこの地域で利用されてきた野生植物として、きのこ類を20種以上、栃、樫、櫟、栗を含む果実や種子を利用するもの30種以上、茎葉を利用するもの35種、地下茎・根を利用するもの10数種を挙げている〔朝日村 1956: 35-36〕。これらの野生植物はそれぞれ非常に興味深い、ここで一つ一つ取り上げて説明する余裕はないので、以下に二つだけ取り上げて若干説明しておきたい。

一つは、地元の人々が自然に生える粳米とみなした「じねんご」(自然粳), または「野麦」とも呼ばれた山笹の実である。朝日村に残る文書には「同年(天保三年辰年)じねんごと申して山の小笹に實り候に付六月下旬より七月中旬まで村中のもの日々右じねんご取り参り候所高山並に山口邊の者も大勢取に参候……、村方の者一同に壹人分四斗より四斗五升づゝ取歸り候」とある〔朝日村 1956: 43〕。笹や竹の実は数十年に一度しか実を付けず、実を付けると間もなく枯れると言われているが、上記の記録からすると、それでもかなりの量を採集していたことことが分かる。笹の実は搗いて粉にし、じねんご団子を作って食べた。

二つはわらび粉である。朝日村でのわらび粉生産がいつごろから始まったかは分からないが、<sup>2)</sup>江戸時代には朝日村の年貢としてわらび粉を出していたようである。<sup>3)</sup>延享2年の郷村出帳は「女稼」の項に葛根とともに、わらび粉を取るためのわらび根の採集が記されている。わらび粉の製造はおよそ次のごとくであった。まず9月中旬から10月末にかけて、あるいは初雪が降る頃根を掘る。これはかなり重労働だったようである。水洗いした後の処理は、古くは手槌で、大正に入ってから水車を利用して根を杵で砕き、それを「もみ槽」にかけて「垂れ槽」、さらに「花槽」と順次移動し、でんぶん粉を水にさらして精製・乾燥する。こうしてできたデンプンを地元では「ハナ」という。ハナには、溶液の底に沈殿した部分から取り出した混じりけのない「白ハナ」と、やや上ずみに近い部分の不純物を含む黒っぽい色をした「黒ハナ」とがあった。白ハナは主として町に持って行って必需品と交換され、黒ハナは村内で自家消費された〔同上書: 291; 田草川 1975: 12〕。わらび粉を「わらび団子」や「わらび餅」にして食べたり、味噌などに混ぜて焼いて食べた経験は秋神地区の60代以上の人ならほとんど記憶している。

秋神地区のわらび粉生産に画期的な変化が起こったのは大正から昭和にかけての時期である。わらび粉を糊にすると極めて粘着力が強くまた虫が喰わないので、当時岐阜市で盛んであった和傘の製造に用いられるようになったのである。こうして新たな市場を見いだした秋神のわらび粉の販売量は、明治3年にはわずか三十石三斗一升(二斗で一両)であったが最盛期の昭和7年には450石(2万8,000円)まで増え、その後昭和30年代に新しい接着剤が登場したため徐々に減った〔朝日村 1956: 292-293〕。それでも昭和30年代には秋神地区だけで100基以上の水車があったという。そして生産自体は昭和40年代初頭ころまで続いたようである〔同所〕。<sup>4)</sup>

ところで、わらび根の採集はどのように行われていたのだろうか。古くは自然に生えたわら

- 
- 2) 秋神地区ではわらび粉の製法は弘法大師が教えたと言えられており、昭和24年12月にわらび粉集荷人一同が農協秋神支所前に大師像を建てた。  
 3) 秋神地区最奥の胡桃島に住む小林氏によれば、わらび粉を年貢の一部として納めた文書があるとのことであるが、筆者はこれを見ていない。  
 4) 文書の記録では確かめられないが、朝日村で筆者がみた、わらび根を担いでいる婦人の写真のうち最も新しいものは昭和40年11月の日付をもつ。



びを探して掘っていたと思われる。しかし、「蕨根の採取は輪番的に二十年目くらいでなければ掘られず」[同上書：293]という記述からも分かるように、正確な年代は不明であるが、あたかも焼畑のように採集場所を周期的に替えるようになった。わらびは日当たりの良い土地に生えるので、効率よく採集するために、少なくとも昭和に入ると森を切り開いて草地にし、専用のわらび山（わらび田）を作るようになった。そして春になると、よそ者がわらびの若芽を採らないように見張りに出た [田草川 1975: 12]。朝日村の尾根の反対側、現在の小坂町に住む年配の女性は、子供の頃見張りの目を盗んでわらびの若芽を採りに行ったという（インタビュー 1992）。こうして、わらびは採集対象の植物から半栽培作物となったのである。

明治末から大正にかけて秋神地区で牛の放牧が始まり、この牧場が後にわらび山と組み合わされていった。すなわち、春先にわらび山に火入れを行い、不要な草を焼くと同時にわらびの発芽を促した。その後で牛を山に上げると、牛は雑草を食べるがわらびはアクが強いので食べない。牛の糞が肥料となったことは言うまでもない。こうした山焼きによるわらび栽培を、同一場所で5～10年続けると他の場所にわらび山を移した。このため最盛期の頃にはあちこちの山が草地となっていたようである。<sup>5)</sup> 野本氏によれば、日本に古くからある野焼き（山焼き、草山焼き）は元来採集植物の繁殖増進を求める原始農業で、やがて本格的な焼畑に発展する過渡的形態である [野本 1988: 231]。朝日村のわらび山が本格的な焼畑への移行過程にあるとは思えないが、火入れが採集植物の繁殖増進を目的としていることは確かである。筆者は、秋神地区の山焼きは、すでに本稿Iで触れたジャワの草地焼きと同様、焼畑の一タイプであると考えている。

植物の採集に加えて動物の捕獲・狩猟も盛んであった。この地方には18世紀中葉には鉄砲が入っているが、それ以前の猟は落とし穴、追い込み、罠、霞網、もちによった。秋神地区に鳥屋峠という名の峠がある。毎年晩秋に数千の鳥が群れをなしてこの峠を越えて移動するので、かつてこれらの鳥を霞網で捕獲したことから鳥屋峠の地名がついたと言いつたされている。興味深いことに、大正4年末の調査によれば、狩猟者乙種（網で鳥を捕る猟師）が秋神地区には13名もいた。鳥の他、猪、熊、鹿が狩猟の主たる対象であった。加えてイワナ、アマゴ、ウグイ、アユなどの溪流魚も重要な食料であった [同上書：318-320]。

秋神地区は、身の回りにあるあらゆる資源を生活に取り込んできた社会である。そこでは一つ一つは非常に少量ではあるが、無数の資源を集めてようやく一つの生活を成り立たせてきた。わらび粉などはしばしば飢饉の際の救荒食として扱われる [佐々木 1988: 123]。同様のことは「野麦」や他の野生食料なども同様である。しかしこれは、米やその他の穀類が豊富にある社会を基準にした場合の評価である。森をベースにした生活にとっては全てが常食でありかつ

5) 小林氏とのインタビュー。ただし、わらび栽培と牧畜とを、正確にいつから、どのような経緯で組み合わせるようになったかははっきりしない。

救荒食なのである。

## 結 語

本稿で概観したように、ジャワの森林は19世紀後半以後激減し、それにとまって焼畑も急速に衰退に向かった。また、19世紀以降のジャワをみると人々の暮らしが森と深く結びついていた印象は受けない。これに対して日本の豊根村と朝日村ではジャワよりもずっと後まで森を中心とした生活を営んできた。このような事態をどのように考えたらよいのだろうか。この問題を、仮説的ではあるが歴史的視点から整理し、あわせて将来を展望してみたい。

まずジャワについてみると、ヒンドゥー王朝期にあつては、王国権力の基盤は米の輸出とそれによる香料貿易であつた。この構造がジャワにおける森林利用の方向を決定した。つまり、王都周辺および直接支配下にある土地では林産物の収集ではなく、森林を伐採して水田や常畑を拡大することが奨励された。田畑の拡大こそが王国の発展の証なのである。ジャワ語で「歴史」を意味するババット (babad) の動詞形、ムババット (mbabad) が、「森などを切り開く」という意味を持つことは象徴的である。ジャワの森は輸出品としての林産物には恵まれなかったが、10世紀の碑文にも記されているように、ジャワ内部で食用に供される動植物には富んでいた。さらに、王国権力の支配を受けていなかった地域では焼畑や狩猟・採集も重要な位置を占めていたものと思われる。15世紀後半から始まる「交易の時代」は、香料を入手するという面でも、膨張しつつある東南アジアの都市人口の食糧需要に対応するという面でも、ジャワの米の増産を刺激した。マジャパヒト期に行われた大規模な灌漑を伴う農業開発はこうした背景を持っていたと思われる。そして、この傾向はイスラーム王国マタラムの成立以降も続いた。しかし全体としてみると植民地化以前のジャワではまだ森は健在で、恒久的耕地での農業とともに、狩猟・採集、焼畑も一定の重要性をもって一般住民の生活に組み込まれていたと思われる。

イギリスおよびオランダの植民地権力も、ヒンドゥー、イスラーム諸王朝と同様、ジャワの土地を森林として利用するのではなく、森林を切り開いて恒久的耕地に変えることを基本政策とした。1830年に導入された「強制裁培制度」は森林伐採の大きなきっかけとなった。この制度の廃止以後、植民地政府やヨーロッパ資本による農園開発は、森林を大規模に伐採した。しかも、鉄道や道路網の整備をともなったため、従来入れなかった森林地帯に一般のジャワ人が入植する結果をもたらした、これも森林消滅の大きなきっかけとなった。他方で植民地政府は地租を挺に、住民に米の増産を強制した。というのも、19世紀後半以降、ジャワの米はジャワ内部の需要だけでなく、ジャワ以外のインドネシア諸地域の食糧需要を満たすためにも極めて重要であったからである。こうして農民は自らの食糧自給と租税に駆り立てられるように森林を開墾していったのである。この意味で19世紀の後半から20世紀初頭にかけての焼畑は、かつて

森とともに生きたジャワ農民が、森の消滅を前に放った最後の光芒であったといえよう。

ところで、森林の利用方法を比喩的に表現すると、森林生産物（森林に棲む動物も含めて）を直接利用する狩猟・採集や、森林の再生産力を利用した焼畑は、森林の総合的な生産力——「元金」——の「利子」を消費していることになる。これに対して森林を恒久的な耕地に転換してしまうことは「元金」に手を付けたことになる。ジャワの歴史は、長い時間をかけて森を食い潰してきた、つまり「元金」に手を付けてきた歴史といえる。しかし、それが直ちに土壤の崩壊をもたらすとは限らない。ジャワの場合、火山性の肥沃な土壤が究極的なストックとしてあるため、水の問題さえ解決できればかなりの程度生産は維持できる。しかし、これはあくまでも現在までの状況であり、今後も土壤の貧困化によって不毛の地とならない保証はない。さらに、ジャワのように肥沃な土壤を持たないところでジャワと同じように森林を伐採して、耕地を拡大することは危険である。

ジャワについて、本稿でも触れた人口増加と耕地の拡大との関係を最後に補足しておこう。この問題は通常、19世紀ジャワで急激な人口増加が生じ、その結果耕地の拡大が起こったというふうに説明される。しかし、人口増加は、それ自身何らかの条件からもたらされる結果でもある。もしジャワの土壤が貧しければ、人口増加そのものが生じ得なかったのである。以上の議論の枠組みは基本的には日本についてもあてはまる。まず、豊根村の事例からみてゆこう。

豊根村の事例は、ある意味で日本の山村がたどった典型的な形である。すなわち、江戸末期までは焼畑と狩猟・採集を組み合わせた森林の利用形態であった。江戸末期から茶、桑などの換金作物が一時導入されるが、明治期以降には森も焼畑地も杉と桧の人工林に変えられていった。しかし、人工林も森林の「利子」を利用するという構造では以前と同じである。豊根村のような人工林への転換が日本各地で生じたのは次のような事情による。まず、日本では一般家屋に多量の木材を使うので、木材需要が常にあり、林業が流通機構の整備や運送手段の合理化により次第に焼畑や狩猟・採集より有利になった。この点、一般家屋の主な素材が竹と土であるジャワの場合とは異なる。一方、山の森を耕地に転換しようとしても、全体に斜面が急で、木を切り払って常畑にしても土壤の崩壊や表土の流出の危険が大きいことである。こうして豊根村を初め日本各地の山村は、需要が多く価格が高い杉と桧に特化した、山のモノカルチャー的利用へ一気に傾斜したのである。この構造は、インドネシアのコーヒー、ゴム、砂糖の場合と同様、生産効率は高まるが、弱さも内包している。安い外材が大量に輸入されるようになると、豊根村のように杉と桧に依存した山村が、たちまち経済的に行き詰まっていったことは周知の事実である。

朝日村の秋神地区は同じ山村でも豊根村とは異なる経過をたどった。つまり、江戸期から明治・大正にかけて、住民は森林の「利子」を直接利用する狩猟・採集を重要な生業として行っていた。そして、昭和に入ってわらび粉の需要が増大すると、山焼きによるわらび栽培も行

うようになった。豊根村と異なる点は、雑穀を主体とする焼畑が豊根村のように大規模に行われなかったこと、戦後になるまで人工造林がほとんど行われなかったこと、したがって、多種多様な自然資源を寄せ集めて生活を維持するシステムがずっと後まで残ったことである。かかる経済システムがどのような社会文化的構造をもっていたかは非常に興味ある問題であり、将来の課題としたい。

最後に日本の事例にみられる人口と森林との関係について触れておこう。山村の人口変化については別に扱う必要があるがここでは次の点だけを指摘しておく。豊根村も朝日村も江戸期から明治中頃まで、世帯数と人口にそれほど大きな変化はなく、微増程度であった。これらの村では、ジャワのように森林を開墾して耕地を作れば新たな生産が可能となるほど自然の条件に恵まれていない。したがって、より生産性の高い土地利用法が出現したり、全く別に収入機会が現れるなどのあらたな条件がない限り、人口が自然に増えることはない。豊根村や朝日村にも新たな収入源が出現するが、それは村の人口を一挙に増加させるほどではなかった。さらに、統計には現れないが、村で生活できなくて村外に出ていった人々もいたであろう。明治以降には、平地の産業社会がこのような人々を受け入れていった。極めて大ざっぱに言えば、今日、日本の森林が国土の3分の2も残っているのは、この産業社会が農山村の余剰人口を吸収してきたからである。この点ジャワの場合、産業社会の発展は緩慢で、他方で肥沃な土地が人口増加をもたらし、このことが山野の開墾を限界まで押し進めることになったのである。

#### 参 考 文 献

##### 略記号

*TBB Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur.*

*TNI Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië.*

*VBG Verhandelingen van de Bataviaasch Genootschap van Kusten en Wetenschappen.*

愛知県. 1970. 『北設楽民俗資料調査報告』名古屋：愛知県教育委員会。

Anonymous. 1842. Uittreksek van een Beschrijving van Java. *TNI* 1842 (2): 201-220.

Anonymous. 1844. Het Tenggersch-Gebergte in Dezelfs Volcanischen Toestand Beschouwd. *VBG* 20: 1-98.

Anonymous. 1854. De Rijstkultuur op Java: Vijftig Jaren Geleden. *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië* 2: 1-117.

Anonymous. 1895. Roofbouw en Boschvernieling. *TBB* 10: 87-106.

Anonymous. 1917. Regeeringsonderzoek naar de Rechten op Ontgonnengrond (1867). *Adatrechtbundels* 14: 149-183.

朝日村. 1956. 『朝日村誌 全』朝日村誌編纂委員会, 朝日村役場。

安藤慶一郎 (編). 1989. 『豊根村誌』豊根村。

———. 1991. 『豊根村誌 資料編 2』豊根村。

———. n.d. 「近世村人の生活と焼畑農業」(手書き文書)。

Cordes, J. W. H. 1888. Het Boschgebied op Java's Bergen en Zijn Belang voor de Irrigatie. *Indisch Gids* 10 (1): 681-731; 10 (2): 933-977.

Eyken, A. J. H. 1909. *Het Boschwezen in Nederlandsch Indië*. 's-Gravenhage: Van der Beek's Boekhandel.

- Hall, Keneth R. 1985. *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ham, S. P. 1908. De Grond- en Boschpolitiek op Java. *TBB* 35: 109-273.
- Hoëvell, M. R. van. 1853. *Tochten van een Engelschman door den Indischen Archipel voor Nederlandsche Lezers Bewerkt*. Vol. 1. Zalt-Bommel: John Noman en Zoon.
- Horsfield, Thomas. 1814. Over de Rivier van Solo in een Brief van de Diregerende Leden van het Bataviasche Genootschap. *VBG* 7: 1-16.
- 石井米雄；桜井由躬雄. 1985. 『東南アジア世界の形成』東京：講談社.
- Jones, Antoinette M. Barrett. 1984. *Early Tenth Century Java from the Inscriptions: A Study of Economic, Social and Administrative Conditions in the First Quarter of the Century*. Dordrecht: Foris Publications.
- 野本寛一. 1988. 『焼畑民俗文化論』(3版)東京：雄山閣出版.
- 大木 昌. 1986. 「ジャワ稲作誌序説——ジャワ史における農民の移動と伝統稲作——」『南方文化』13: 1-45.
- . 1987. 「19世紀の中・東部ジャワにおける焼畑稲作」『アジア経済』28(7): 2-21.
- . 1988. 「ジャワにおける森林の減少——生態環境の変化と住民生活の影響——」『国際研究論集』(八千代国際大学紀要) 1(1・2): 471-498.
- Pigeaud, Theodore G. Th. 1960. *Java in the 14th Century: A Study in Cultural History, The Nagara-kertagama by Rakawi Prapanca of Majapahit, 1365 A. D.* Vol. 3. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Reid, Anthony. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. Vol. 1. New Haven and London: Yale University Press.
- 佐々木高明. 1988(第13刷). 『稲作以前』東京：日本放送出版協会.
- Sevenhoven, J. J. van. 1838. Java: Ten Dienste van hen die over dit Eiland Wenschen te Reizen. *TNI* 1838(1): 217-257.
- Soest, G. H. van. 1874. Een Nieuw Bezwaar tegen Ontginningen op Java. *TNI* 1847(1): 279-294.
- Stibbe, G. D., ed. 1921. *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*. Tweede Druk, Vierde Deel. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』東京：勁草書房.
- 田草川譲. 1975. 『ひとり旅の飛驒』東京：暮しの科学社.
- 坪内良博. 1986. 『東南アジア人口民族誌』東京：勁草書房.
- Veth, P. J. 1903. *Java, Geographisch, Ethnologisch, Historisch*. Vol. 3. Haarlem: De Erven F. Bohn.
- Zwart, W. 1939. De Boschoppervlakte van Java en Madoera. *Koloniale Studien* 9: 377-392.